
薔薇の名前

ネーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇の名前

【Nコード】

N9914U

【作者名】

ネーマ

【あらすじ】

愛妻との結婚記念日を祝う為に、ロイヤルハynesの花束を抱えてホテルの展望エレベーターに乗り込んでいたミッターマイヤーは、自分の部下ユリウスの死に出会う。

薔薇の一族の異名を持つエーベルバッハ伯爵家の跡継ぎになることが決まっていた彼の名前がつけられた薔薇があり、それを見に行き落胆して帰ってきたという士官学校時代の友人の言葉に、ミッターマイヤーはその薔薇を確かめに薔薇園に赴く。

そこで見つけたユリウスという薔薇は、エーベルバッハ家の長の証

である青薔薇ではなかった。

そして薔薇の名前に隠された秘密を探るロイエンタールに危機が――

銀河英雄伝説の二次創作で、メインキャラは双壁、推理ものです。
ネーマ倶楽部発行の同人誌からの転載になります。

薔薇の名前（1）（前書き）

銀英伝の二次創作ですが、他の2つの推理小説の二次創作でもあります。

1つは冒頭部分ですぐにわかるかと。

薔薇の名前(1)

展望エレベーターの中は、その男が持つ薔薇の香りに満たされていた。

それは本当に見事なロイヤルハynesで、豪華ではあるがそれ以上気品な雰囲気を持っている。

オーデインにあるホテルの中での最高層を誇るシェーンブルンの最上階はレストランになっており、ほとんどの客はそこへ行くのであろう。何度か途中の階に停まったが、降りる者の方が少なく逆に乗り込む者の方が多かったので、最上階に着いた時にはエレベーター内は満員に近かった。

高いのは当然建物の高さだけではなく、値段の方もそれ相応であったら、エレベーターに乗っている人間も着飾った男女が多く、香水の匂いもあふれていた。しかし薔薇の香りはそれらの人口の香りとは違い、本物らしく人々を魅了しているようだった。

思い思いに着飾った人々は、今宵の食事やその後の予定の話に夢中で、奥に立っていたあまりその場に相応しい服装ではない、顔色の悪い男に気づかなくとも不自然ではなかった。一番近くにいた人物も背中を向けていた為に、そこに誰かいたらしいことしか覚えていなかった。

それはその男が軍用コートの前を深く合わせ、人々から顔を隠すように壁の方を向いていたせいもあるが、それ以上に他の乗客の他人に対する無関心の作用の方が強かったようである。

そのようなわけで、あらかじめ頼んであった花を取りにホテルの二階にある店に行った時、その大きさと派手な包装に———といっても気品溢れるこの花にござってした飾り付けは unnecessaryなので、ごく普通のラッピングをして赤やピンクの細目のリボンをまとめて根元を縛ったもの———驚き、恥ずかしそうにホテルまで持ってきた蜂蜜色の頭をした男も、最初こそは無遠慮な好奇心に満ちた視線に

晒されたものの、すぐにティー系の香りを提供するだけの存在になることができたのだった。

やがてエレベーターの扉が開き、順序に客が降りていく。

「あら、イヤリングが……」

左耳から落ちたイヤリングを拾おうとして女が屈み込まなければ、それに気づくことはなかったであろう。実際、壁にもたれている男の足元に、赤黒い染みが広がりつつあることにも誰一人として気づいていなかったのである。

指先に触れたぬるぬるしたものが何であるか、最初はわからなかった。

イヤリングを拾って立ち上がり、手を開いてからなぜ自分の指に血がついているのか不思議に思い、それからようやく屈んだ時に何か濡れたものに触れたからだと気づく。

引きつった悲鳴が女の口から漏れた。

戻ってきた連れの男が、女が震える手で指すものを見て思わず後ずさりする。

ぐらりと男の体が揺れた。

倒れた男の腹部に刺さっているナイフを見て、今度こそ女は甲高い悲鳴をあげた。

我先に逃げようとする人の流れに逆らったロイヤルハynesの花びらが床に舞い落ちる。

「い、医者……」

女と支え合いつつ震え声で訴える男を制して

「いや……」

花束を床に置いてからひざまずき、軽く頸動脈にふれた。

「もう死んでいる……医者より警察だ」

騒ぎを聞き付けてホテルの警備員が走ってくる。

「今、エレベーターから降りた客を集めてくれ。まだそこらにいるはずだ」

死体を目の前にしても動じることなく、指示している軍人に訝し

げな視線を向けつつも、とにかく散らばりかけている客を集めにかかる。

「あの…あなたは？」

駆け回る警備員の中で最も年長者がようやく問いかけた。

「私はウォルフガング・ミッターマイヤー中将だ。この男は私の部下で、ユリウス・ベルンハルト・ヴィクトリヒ少尉」

立ち上がり敬礼する。あわてたのは警備員の方だった。

「……中将閣下でらっしゃいますか。そ、それで今日はどのような任務で——あ、もしかして、何か極秘任務とか……」

急に小声になる警備員に苦笑して

「いや、任務でも何でもなし、ただの客だ」

横においてあった花束を拾い上げる。

「結婚記念日なんだ」

人込みに揉まれて多少傷んでいるが、それでも香りは損なわれていない。

「私の名でこのレストランを予約してある。これを妻に」

ミッターマイヤーは恥ずかしそうに咳払いをし

「エヴァンゼリンに届けてくれないか？ 私は行きがかり上、現場検証に立ち会わねばならないだろう。レストラン内の殺人ではないから、今すぐ店じまいということもなかろう。エレベーターは他にもう三機あるしな。私にかまわず食事をして帰るように伝えて欲しい」

「はい、わかりました」

大事そうに花束を抱えた警備員が去ると、にかわにエレベーター内に血の匂いが立ち込めた。

（……薔薇の香りが血の匂いを消していたのか？ だとしたら、俺が薔薇を持っていなければもっと早くにユリウスに気づいたかも知れない）

衣服を乱さないよう注意して腹部に刺さったままの凶器を見る。

（左腹部…腎臓のあたりか……）

自分で人を刺す仕草をしてみて

（右利きの人間が正面から向かい合ったまま刺すと、だいたいこのあたりになる。つまり犯人は右利きということか……）

（ん？ これは――）

それまで漠然と眺めていた凶器のナイフの柄に、特徴のある模様と刻まれている文字に気づいてミッターマイヤーは愕然とした。

それは帝国軍士官学校の成績優秀者に贈られた記念品だったのである。

（そういえば、ユリウスは士官学校をトップの成績で卒業したという話だ）

顔を近づけて見て、それに刻まれた年と名前からユリウス本人のものであることを確認した。

（つまり、ユリウスは自分の持っていた凶器で刺されたというのか？ 先にユリウスが相手を刺そうとして逆に……？）

その考えは一瞬にて却下される。

（こんな狭い場所でそんなことをして回りの人間にわからないはずはない。やはり犯人があらかじめ持っていた……）

これが誰にでも簡単に入手できるものならばミッターマイヤーも悩まなかったであろう。しかし、これはそこいらで売っているような品ではない。一年にたった一人だけに贈られる、荣誉ある物なのだ。

それともう一つ不思議でならないことがあった。

（あれだけ混雑していたエレベーター内で、それでもユリウスを刺すことはできる。凶器を抜かなければ血も漏れにくい。人込みが幸いしてすぐに倒れもしなかった）

（だが、誰もユリウスの声を聞いてはいない……もし何らかの毒物でも用いられて即死に近い状態だとしても――）

薄くまぶたを開いているユリウスの死に顔を、苦悶を堪えているかのように唇をかんでいるその顔をそっと見る。

（決して静かではなかったが、呻き声をあげれば聞こえはしただろ

う。人殺し、とでも叫べば――」

その状況を想像してミッターマイヤーは身震いした。狭いエレベーターの中でナイフを持った犯人が他の乗客をも傷つけたら……あるいは逃げ場のない状況に切羽詰まり人質を取ったかも知れない。

（これは単なる行きずりの犯行ではなく、明らかにユリウスを狙ったものだ。つまり犯人としてはユリウスさえ殺せれば後の乗客に危害を加えるつもりはなく、それを知っていたからユリウスは声をたてなかったのか？ それで黙って殺されていたのか？）

（だが……そのような、自分の命が危ういような状態で、そこまで考え実行することが可能なか……）

ミッターマイヤーは自分がそのような状況に追い込まれた時のことを考えてみた。

（確かに他の人間に危険が及ぶことまでは考えても、だからといってそのまま犯人を野放しにするようなことは……）

「あ、あの、ミッターマイヤー中将」

先ほどの警備員が戻って来て戸口から呼ぶ。

「どうした」

「中将の奥様が――」

立ち並んで人を入れないようにしている警備員達の間からエヴァンゼリンのクリーム色の頭がのぞいており、いそいでミッターマイヤーは立ち上がり近づいた。

「……こんな所へ来るんじゃない。伝言は聞いたのだろうか？」

「私一人で食事をして帰れなんて、ずいぶんひどいことおっしゃるのね」

「すまん……結婚記念日なのに、この埋め合わせは必ず――」

頭を下げかけたミッターマイヤーの口にすっと人差し指をたてる。「誤解しないで下さいね、あなた。私怒っているんじゃないよ。

あなたをほおっておいて私一人で何を食べてもおいしいわけないですもの。先に帰ってお夜食作って待ってます」

そう言ってエヴァンゼリンはほほ笑んだ。

「ありがとう、エヴァ」

照れくさそうに頭をかき、それから勇気を振り絞って妻のほおにキスをする。

「お花ありがとうございます。とってもうれしかったわ」

エヴァンゼリンは夫の数万分の一の恥ずかしさもなく、たおやかな笑みと共にキスを返した。

警備員にエヴァンゼリンをタクシーまで送り届けるように頼んでから、再び遺体のそばに戻った頃ようやく知らせをうけた警官がやって来た。

「ご苦労様。私は偶然エレベーターに乗り合わせていたウォルフガング・ミッターマイヤー中将だ。何か協力できることがあれば」

「よろしく願います。さっそくお尋ねしますが、被害者はあなたの部下そうですね」

「名前はユリウス・ベルンハルト・ヴィクトリヒ、士官学校を卒業して配属されたばかりだ」

「エレベーターに乗り合わせたのはあなた一人ではないということですが」

「ああ、その時の乗客は警備員に頼んで集めてもらっているはずだ」
ミッターマイヤーが警官と話している間に鑑識官が遺体の状況を調べている。

「ということはこの中に犯人が……？」

一室に集められた乗客は、皆不安そうである。この中に殺人犯がいるかも知れぬとなれば当たり前であろう。

「一応名前と連絡先は調べてあります。全員身元もはっきりしていました」

警備員が手渡したファイルを警官は熱心に見入っている。

「全員がこの階のレストランの客なんだな」

「ええ、最上階にはこのレストランしかありません。しかも予約しないと利用できないのです」

「エレベーターの中で殺人を犯せばそれが発覚しないはずはなく、

レストランにわざわざ予約までして自分の身元を明らかにしているというわけか……このエレベーターに乗るには何か？」

「いいえ、直通ではなく途中の階にも止まりますし、誰でも利用できます」

その後一人一人に話を聞いてみたが、怪しい人物を見た者はおらず、被害者が乗っていたことさえすぐそばにいた者もほとんど覚えていなかった。

ミッターマイヤーが凶器の出所について説明し、それについて尋ねてもみたが、やはり誰も知らないようだった。もっとも知っていたも黙っていたのかも知れないが。

せっかく食事を楽しみに来た所を足止めを食らった形になってほとんどの者が不平を訴え出している。殺人現場に立ち会わせただけでも十分過ぎる程不運なのに、容疑者扱いされて気分のいい者がいるはずもなく、中には縁故のある貴族に連絡をとると言い出す者も出てた。

常識的に考えて、逃げ場のないような所で殺人を犯す者がレストランを予約しているはずはない。しかしユリウスがエレベーターの中で死んだことは確かなのである。

そこへ鑑識官がやって来て何やら警官の耳に囁いた。瞬時に警官の顔が変わる。

「間違いないのか？」

「はい、間違いありません」

「そうか……」

鑑識官の持つて来た書類に目を走らせると

「どうも、長い間お引き止めして申し訳ありませんでした。後日何かお尋ねすることがあるかも知れませんが、今日のところはもうお引き取りただいてけっこうです」

そう言って深々と頭を下げた。

客達はぶつぶつ文句を言いながら三々五々散らばっていく。予定通り食事に向かう者もいれば、気分を害したとそのまま帰る者もい

る。

「どうしたんだ？ あのまま全員帰ってしまったていいのか？」

ミッターマイヤーの疑問には鑑識官が答えた。

「あの中に犯人がいないことがわかりましたので」

「犯人がいない？」

「ええ」

部外者に見せてよいものかどうか悩んだようだったが、結局書類を見せ

「解剖しなければ詳しいことはわからないのですが、即死ではないんです。刺されてから死亡するまで少なくとも三〇分程度経過しているんです」

「三〇分だと？」

自分でも声が大きくなったことに気づいていそいで小声になる。

「そんな馬鹿なことがあるか」

「しかし事実です。あのエレベーターが一階から、ああ、地下もありますから地下三階からここまで移動するのにどのくらいの時間がかかりますか？ 三〇分はかかりませんよね」

「では、刺された場所は違うと？」

「そう考えるのが自然です。そうでなければ刺されてから三〇分もの間、被害者はエレベーターに乗ったままということになってしまいます。その間もたくさん人間があつたエレベーターを利用しているんです。誰かが気づくでしょう。一往復か二往復ならば、あまりに人が多くて降り損ねたのだろうと見てもらえますけれどね。まさか自分が刺した人間をつれてわざわざエレベーターに乗り込むことはないでしょうし、どの乗客もユリウスは最初からあの奥に立っていたと証言しているのです。全員身元がはっきりしている以上、事件とは無関係だと考えられます」

それにはミッターマイヤーも同感だった。

「だが、死ぬまでの間、ユリウスはここで何をしていたというんだ？ 手当をしても助からなかったかも知れないが、それにしても普

通ならば助けを求めるはずだ」

「おそらく被害者はここへ逃げてきたのではないかと思われず。絶命していませんですから、犯人がとどめを刺そうとするでしょう。ホテルなら人目がありますから」

てきぱきとユリウスの遺体を運ぶ様子を見ながら、ミッターマイヤーはまだ腑に落ちないことだらけであった。

「後は我々の仕事です。どうもご協力ありがとうございました」
そう警官に言われると引き下がるしかない。

「そうか、ではよろしく頼む。何か進展があればいつでも連絡して欲しい。殺されたのは私の部下なのだから」

後ろ髪を引かれる思いでミッターマイヤーは帰途についた。

翌日、ミッターマイヤーはデスクワークの間も警察からの報告を待っていたが何の報告もなく、その翌日も何の連絡もなかった。

すぐに犯人が断定できなくとも、司法解剖は終わっているだろうから、それだけでも知らせてくれないものかと思う。

「浮かぬ顔をしているが、何かあったのか？」

昼食後、一緒にコーヒーを飲みながらロイエンタールが尋ねた。

「先日結婚記念日だと言っていたが……最愛の奥方と喧嘩でもしたのか？」

もちろん本気で言っているわけではない。

「残念ながら、エヴァとはまだ喧嘩をしたことはなくてね」

「そいつはごちそうさま……ということは原因は他にあるのか」

ミッターマイヤーはエレベーター内で自分の部下が殺害された話を聞かせた。セルフサービスのコーヒーを注いでロイエンタールは黙って聞いている。

「それで警察からの連絡を待っているというわけか」

「ああ、検死結果くらい知らせてくれても良いと思うのだが……」

「……それにしてもおかしいことだらけだな」

かちやりとソーサーが音をたてた。

「お前もそう思うか？」

ミッターマイヤーの言葉にふっと笑みをもらす。

「よそで刺されたという見立ては本当だろう。三〇分間があれば乗り込んで来た客に救急車を呼んでもらうこともできたろうから、エレベーターに乗ったのは死ぬ直前だろうな」

「俺もそう思う。俺は二階から乗ったのだが、もう満員状態で、奥にユリウスがいたことには気づかなかった。もしかしたらもうその時には死んでいたのかも知れない」

「あるいはな……だが、それまでの間になぜ助けを求めなかった？ 犯人が止めを刺そうとしたらわけないはずだ。走って逃げたとしても女の足でも追いつくだろう。さすがの俺でも腹にナイフ突っ立てたままじゃ全力疾走は無理だ」

「追われて逃げたわけではない。助からないことを知っていたとしても、なぜあそこを死に場所を選んだのか……」

「死に場所……」

思い切ったミッターマイヤーの言葉にぴくりと眉が動いた。

「そうとしか考えられない……というか、そう考えれば辻褄が合うのだ」

コートの前を深く合わせて自分の身体に刺さっている凶器を隠し、おそらくは呻き声をたてまいとして歯をくいしばっていたに違いない。

「それにナイフのことも……」

「年に一人にしか貰えないという例のヤツか」

「ああ、名前が刻んであるんだ。あれがユリウスのものでないのなら、まだ少しはわかるんだが」

「それにしたって普通人を殺すのにそんなものを使うか？」

「お前もそう思うか。なんといってもこの世に一本しかない品だ。第一ありがたがって金庫にでもしまい込んでおくものだろうに」

「ほお……お前だったらそうするのか？」

ロイエンタールが意地の悪い目付きになってふんと鼻を鳴らす。

「俺はともかく、親父に見せたら金庫にしまい込む可能性はあるな」
「なるほど……」

即座にそう答えるミッターマイヤーをそれ以上からかう気は失せた。

もしも自分だとしたらどうするだろうか？ 一緒に喜んでくれる者がいるわけでなし、そのまま机の引き出しにでも入れたきりになっているかも知れない。

「それにしてもそんなに気になるなら、こちらから尋ねてみたらどうだ？」

「そうだな。夕方までに何の連絡もなければそうしてみよう」
すっかり冷めたコーヒーは苦かった。

「なんだと？」

その日の仕事を終え、警察へ電話をしたミッターマイヤーは思わず聞き返していた。しかし何度聞いても返答は同じであり、業を煮やしたミッターマイヤーは帰りに立ち寄ってみた。

「まだ三日しかたっていないんだぞ。いったいどうなっているんだ」
「そう言われてましても私共には……」

「責任者に会わせてくれればいい」

詳しいことは話せないの一点張りの男の胸ぐらをつかみかかっていた心境を堪えるのに苦労するミッターマイヤーの目が、あの時の警官の姿を捕らえた。

「おい」

ミッターマイヤーを見た警官はぎょつとして逃げようとする。しかしそれを簡単に許すようなミッターマイヤーではない。

「まさか、俺の顔を見忘れたというわけではないだろうな」

「い、いいえ……」

「では何故逃げようとした」

詰問されて警官は言葉に詰まる。

「捜査が中止されたとはどうゆうことだ」

「……」

「三日で迷宮入りか？　おい、そんな馬鹿な話はあるまい」
強く腕をつかまれていては逃げることもできず、警官はただ視線を反らせるだけだった。

「あの時なんと言ったか覚えているか？　後は自分達の仕事だと言ったんだぞ。だったらその言葉はきちんと守ってもらおう」

「……」

「お前では話にならないらしいな」

ミッターマイヤーは乱暴に腕を引き寄せ

「誰か説明のできる人間の所へ案内してもらおうか」

息のかかる程の距離から陰しく睨みつけた。

「……そ、それは」

見る間に青ざめ、額に脂汗が浮く。つかまれたままの腕が震えているのは、引き寄せられまいと力を入れているからだけではないようだ。

「そのくらいにしておけ」

言葉と同時にミッターマイヤーの肩におかれた手があった。

「だが――」

振り向かなくても声の主はわかる。

「この男に責任があるわけではないことは、お前にもわかっているのだろう？」

黙ったままさらに陰しく警官の目を見つめ、そこにある脅えの色が自分以外の者に対してであることを感じとると

「くそっ……」

いまいましてそんな態度を隠そうともせずにその腕を放した。

あわてて逃げるように立ち去る警官の後ろ姿をくやしそうに見送る様を、ロイエンタールは笑みを伴って見ている。

「何がおかしい、ロイエンタール」

「いや……ウオルフガング・ミッターマイヤーとはそういう男だったなと再認識したただけだ」

（だからこそ、俺も引かれたのだろうな……）

ロイエンタールに言われなくともわかっていた。そしてだからこそ警官が脅えていたことも。

「圧力がかかったな」

「……だが、なぜ？ 殺されたのは士官学校を出たばかりで任務らしい任務の経験もない、争い事に巻き込まれるような経歴は何もない男だ。捜査を中止して軍に何の益が——」

突然言いよんだミッターマイヤーは、自分を見る男の顔付きからもう一つの選択肢を探り出した。

「貴族か……」

行き場のない怒りが声に現れている。

「とにかく出よう」

ロイエンタールに促されるまま、重たい足取りでミッターマイヤーは車に乗り込んだ。家へ送ろうとするのを制して車を元帥府に向かわせる。

「どうした？」

「ユリウスと士官学校で同期だった者に話を聞く。まだ残っている者がいるはずだ」

「……」

口を真一文字に結び、瞬きもせず正面を見据えている横顔を見ると、ロイエンタールにはそれ以上意見することはできなかった。

（自分で調べるつもりか……だが、個人の力でどこまでできるものか、それよりも警察にかかった圧力が自分の身に降りかかることを考えはしないのか……？）

もう一度その横顔をうかがい見る。

（そんなことを考えるような男でもないか）

やがて車は元帥府についた。

今にも走り出さんとするミッターマイヤーの腕を押さえ

「そんな形相では士官学校出立ての新米が脅えてしまうぞ。俺が探して連れて行くからお前は部屋で待っている」

「……そうか、そんな顔をしているか、俺は」
そうつぶやいて肩を落とす。

「少し落ち着くんだな」

「ああ、わかった」

ロイエンタールと別れて自室へ赴く。

「中将閣下、お忘れ物ですか？」

敬礼をして出迎える従卒に

「いや、そうではない。これから俺の所へ客が来るから、すまない
が何か出してやってくれないか」

「コーヒーですか？ それとも何かお酒がよろしいですか？」

「コーヒーでいい。未成年だからな」

ミッターマイヤーは笑顔で答えると扉を閉め、一度執務机についてから少し考え、ローテータブルとソファのある一角に移動した。

（尋問するわけではないんだから……）

ノックの音がする。

「ロイエンタール中将がお見えです」

「通してくれ」

ロイエンタールが連れて来たのは、いかにも士官学校を出たばかりという雰囲気の小柄な少年だった。

「カール・シュマーレンです」

緊張で語尾と敬礼する手が震えている。

無理はなかった。

任官してまだ数カ月、直属の上官でもない中将に呼ばれる理由が彼に思い当たろうはずもなく、知らぬ間に粗相をしてしまったのか、何か落ち度があったのか、脳裏に浮かぶのはそればかりである。

「おい、ロイエンタール、脅えているじゃないか。無理に引っ張って来たのではあるまいな？」

置物のように固まってしまっている少年を見ながらささやく。

「人聞きの悪いことを言うな。そのへんにいた奴に、誰かユリウス・ベルンハルト・ヴィクトリヒと親しかった者はいないか、と尋ねた

ら、あれが寮で同室だったと教えられたんだ」

「寮で同室とは……そいつは好都合だ」

ロイエンタールが半ば置物と化しているシュマーレンの腕を持ってソファに座らせた。

「俺はウォルフガング・ミッターマイヤーだ」

「ぞ、存じあげております」

「そう堅くならなくてくれ。別にお前をどうしようというわけではない。俺はただユリウス・ベルンハルト・ヴィクトリヒのことを知りたいだけなのだ。寮で同室だったそうだな」

シュマーレンはまだ目を白黒させている。それは確かにその通りなのだが、そのことと今自分がミッターマイヤー中將の部屋へ呼ばれていることの意味が彼の中ではまだ一致しないのだ。

コーヒーを運んで来た従卒は、二人の中將に挟まれている若い少尉に少し驚き、それから丁寧な動作でコーヒーを置いて下がった。

「ユリウス・ベルンハルト・ヴィクトリヒが死んだことは知っているな？　実はミッターマイヤー中將はその現場に居合わせたのだ」

やっと理由が飲み込めたようである。表情が少し和らぎ、肩から力が抜ける。

「少しの間ではあったが、俺の部下が目の前で死んだんだ。どんな人間だったのか気になって、士官学校で一緒だった者の話が聞きたいと思ったのだ」

「そうだったのですか……」

ようやく安心したのか大きく息をつく。

「すまないが、話を聞かせてもらえるか？」

そう中將に頼まれ、コーヒーを勧められて、シュマーレンはおずおずとカップに手を伸ばした。少しでも緊張を解きほぐそうと、二人も同じようにコーヒーに口をつける。

「といっても何をお話すればいいのか……」

「ユリウスが成績優良者に選ばれたことは知っているな」

「はい、もちろんです」

「その時の記念の品をどうしたのかは知らぬか？　ずっと自分で持っていたのか、それとも誰かに？」

少しの間シュマーレンは考えていたが、すぐに顔を輝かせた。

「もしそうだとすれば、あの方に差し上げたのではないでしょうかな？」

「あの方？」

「……その、中將はご存じだと思うのですが、ユリウスには父親がいないんです。もっとも戸籍上というか、一緒に暮らしていないというだけで……」

「ああ、言いたいことはわかる」

「そしてその父親というのは、かなりの家柄の貴族だと言っていました」

二人は顔を見合わせた。

（では、ユリウスの父親が？）

（息子を殺された男が捜査を中止させるのか？）

「それでユリウスはよくその父親に？」

「ええ、定期的に会っていました。生活費や何かもすべて出してもらっていて、将来は父親の後を継ぐことになっていると、生まれた男子は自分一人だからだと言っていました」

「その父親の名前は？」

「それは……」

シュマーレンは口ごもってうつむいた。

「教えてはくれなかったのか」

「はい……何度か頼んだのですが、それだけは言えないと」

「そうか。そうだろうな……」

ねぎらいの気持ちを込めて肩に手をおき

「また尋ねることがあると思うが」

「はい、私でお役に立てるのならいつでも」

まだ緊張を伴った笑顔を見せているシュマーレンを見送り、ロイエンタールの所へ戻る。

「生まれた男子は一人だけか……」

勝手にキャビネットから酒を出しているロイエンタールに苦笑する。

「つまり、女は生まれたわけだ、姉だか妹だか知らんが」

ミッターマイヤーが差し出したグラスに、さも惜しそうに酒を注いでやる。

「いったい誰の酒だと思っているんだ」

「俺が持って来たんだ」

「それで俺にくれたのだから、今は俺の酒だろうが」

グラスを合わせようとすると、もう先にやっており、再びミッターマイヤーを苦笑させた。

「外に作った子供が家を継ぐのが許せなくて実力行使に出て、とはいえ身内から殺人犯を出すわけにはいかなくて捜査を中止させたというわけか」

「だとすれば、まだいいがな」

「違うのか？」

「考えてもみろ。その男にしてはやつとできた男子だったのだろう。外腹で一緒には暮らせないものの、生活費を出し、定期的に会って、成長を楽しみにしていた。息子の方も父親の期待に十分応え、士官学校を優秀な成績で卒業した。記念の品を父親にプレゼントする……その時の息子の誇らしげな顔、父親のうれしそうな様子、想像できるだろう？　そしてその自慢の息子を血のつながった娘に殺されたわけだ。俺がその父親ならば憎むな。警察に逮捕させたりはしない」

「自分の娘でも、か？」

「ああ、自分の娘でもだ。だからこそ、余計に憎むかも知れん。自分で手を下したにしろ、誰か人を雇ったにしろ、法の裁きを受けさせるのでは気が済まなくて捜査を中止させた、復讐を自らの手で行う為にな」

あまりに恐ろしい想像に言葉を失う。背筋が凍るような思いから

逃れようとミッターマイヤーは一気にグラスの中身を喉に流し入れた。

「俺はこちらが正解だと思うのだがな」

他の者が言うのなら、そんな馬鹿なと笑い飛ばしてしまうことができたろう。しかし自分の母親に目をえぐり出されようとした男の言葉には、それだけの重みがあった。

「さあ、飲むのはそのくらいしろ。あまり酔って帰すと俺が奥方に嫌われてしまう。飲みたければ家で飲むなり、どこか店にでも行く方がいい。ここではつまみもないしな」

「なるほど、それが目当てか……ついでだから寄って行け。いいワインもあるし、つまみも出るぞ」

ミッターマイヤー家でエヴァンゼリンの心のこもった手料理を食べ、約束通り年代もののワインの栓を抜いて二人はゆったりと向き合った。

「温かい食事の後にうまい酒か……たまにはよいものだな」

「卿も家庭を持ったらどうだ」

「毎日女が食事を作って俺の帰りを待っているなんて、考えただけでぞっとする」

「……かわっているな」

「その台詞、そのまま返させてもらおう」

まったくロイエンタールにしてみればミッターマイヤーの気持ちに理解しがたい。

戦場に出ている時は、まだそれでも自分の無事な帰還を待っている女がいるというのは励みにもなるが、こうやって毎日元帥府に出勤と帰宅を繰り返している今、そんな女が家にいると思うだけで帰る気が失せるロイエンタールである。

「……本当に、復讐するつもりなのだろうか」

ぽつりと言いミッターマイヤーは色の異なる瞳を見つめる。

「まだ諦めてないのか」

「当たり前だ」

少し無然として答える。

「けちな窃盗や傷害ではなく、れっきとした殺人事件なんだ。目撃者も大勢いる。にもかかわらず事件をもみ消すことができるほどなんだぞ」

「それで……？」

ロイエンタールは舌打ちし

「俺の言っていることの意味がわからん卿でもなかりうに」

「わかつてはいるつもりだ」

「いや、わかつていない」

そのまましばらく睨み合いになった。

先に視線を反らせたのはロイエンタールであった。

「……くれぐれも深入りはするな。まずいと思ったらすぐに手を引け」

「ああ、そうする」

ミッターマイヤーの返事が本気でないことはわかっている。何があっても手を引くような男でないことを知っているからロイエンタールは心配なのだ。

（最愛の奥方のことでも持ち出せば少しは本気に考えてくれるのだろうか……）

しかし何の確証もない今は、徒にエヴァンゼリンを脅えさせるだけに成りかねない。

「乗り掛かった船だ。俺も蔭ながら協力はするが」

「すまん、ロイエンタール」

ワインを注いでくれるミッターマイヤーに表面上は笑みを返す。他の方法ではこの男を止める手立てがないことを考えると、酒の味を楽しむ酔うことのできないロイエンタールだった。

翌日の朝、ミッターマイヤーの部屋に来客があった。

「思い出したことがあったんです」

シュマーレンはほおを紅潮させて言った。亡くなった友人の為に
いうより、中將の役に立てるといふ喜びで誇らしげでさえある。

「ユリウスは自分の名前のついた薔薇があると言っていました」

「名前のついた薔薇？」

「はい。なんでも薔薇の品種改良に力を入れているそうで、毎年賞
も取っているし、実際花屋に並んだり庭園に植えられてもいるそう
です」

「つまり新しい品種にユリウスという名をつけたというんだな」

「そうです」

これは大きな手掛かりだった。

新しい品種が年にどのくらい出るのかはわからないが、その中で
ユリウスという名がついた薔薇がいくつもあるはずはない。

「自分が家を継ぐ時は薔薇園も一緒に引き継ぐのだからと、薔薇に
ついてもいろいろ勉強していました」

「実際にその薔薇を見たことは？」

「残念ながら私は……」

「そうか。あとはこちらで探してみよう」

「お役に立てましたか？」

「ああ、十分過ぎるほどありがたい情報だ。これで父親が誰かわか
るだろう」

その薔薇を捜し出せば、誰が作ったのかもわかる。

「そういえば——」

帰りかけたシュマーレンが振り返った。

「ユリウスは見に行ったことがあるんです」

「それはそうだろう。自分の名がついた薔薇なんだからな。それで
どこへ見に行ったのだ？」

シュマーレンは帝都にある有名な植物園の名をあげた。

「でも……帰って来た時、少し様子が変わりました」

「どんな風に？」

「もっとうれしそうだと思ったんです。話によるとその一族の人は

みんな自分の名前がついた薔薇があるそうで、これで自分もその一員になれたということですよ。なのに、何だか……不思議そうな、がっかりしたような、なんとも言えない表情で……」

「薔薇はあったのだろう？」

「ええ、赤い花だったと言っていました」

ミッターマイヤーは先日エヴァンゼリンへのプレゼントを買う為に訪れた花屋の店先を思い出していた。薔薇の花の種類はたくさんあった。名前はわからないが、赤い薔薇、白い薔薇、黄色い薔薇、紫の薔薇、オレンジ色の薔薇、花びらの色変わっていく薔薇もあった。

その中でミッターマイヤーは淡いピンクの薔薇を選んだのだった。豪華という点においては深紅の薔薇に勝るものはなかったが、エヴァンゼリンには似合わないような気がしたのである。

「色が気にいらないわけではないはあるまい」

「はい、大事なものは名前だったのですから」

「そうだな、名前だ……」

（とにかくまずはその薔薇を見なければなるまい）

薔薇の名前（2）

夕方の植物園には人は少なかった。

中は花や木の種類によって区切られており、ミッターマイヤーはまず薔薇のある所へ行ってみることにする。園内の案内図を見ながら探し当てたそこには目当ての薔薇はなかった。

「植え替えてしまったかな」

一度植えられた花がずっとあるとは限らない。

「実物が見たかったのだが……」

新種の薔薇として登録しているだろうから、調べれば何らかの記録があるはずである。

「……あそこにも薔薇があるな」

黄色いつる薔薇でアーチが作られている。近づいて見ると『エバーゴールド 種類…クライミング・ローズ』と名前を書いたカードが付けられている。

「ああ、そうか……薔薇のコーナー以外にも薔薇はあるのか」

そうなると広い植物園の中の薔薇を、一つ一つ名前を確認して回らなければならない。

「おっと、失礼……」

屈み込むようにして花の名前を調べていたミッターマイヤーの腰にぶつかってきた男がいた。

「いや、俺が下ばかり見ていたからだ」

「何か落とし物でも？」

「落としたわけではないが——」

男はつる薔薇をスケッチしているらしい。

「ほお、うまいものだな」

「いやいや我流だ」

「絵描きというわけではないのか」

「こんな下手くそな絵描きがいるわけないさ」

絵のことはわからないがそう下手とも思えない。

「では何の為にスケッチを？」

「俺の専門はこっちなんだ」

前の方のページをめくると建物のデッサンが並んでいる。

「造園は専門ではないが、アプローチも設計するし、門につる薔薇をからませてみるのもいいかと思ってね。どうも実物を見なければうまく描けなくて」

失敗したらしいスケッチはなるほど一応花のように見えるものの、薔薇なのか百合なのかも区別がつかないような出来栄である。「それに、実際こうやって植えてあるものを見ないと。たとえば白い花は写真で見ればきれいだが、すぐに傷がついて汚くなってしまふ。雨が降っただけで散ってしまう花もある。玄関先にちよっと飾るのならともかく、こんな風に屋外にアーチを作るのなら、後々のことも考えなければならぬ。手入れのこともだが、季節によって花どころか葉まで散るものは使えない。これは建物でも言えることだ。見てくれだけよくても、住む人が不便では仕方ないからな」

初対面にもかかわらず男は饒舌だったし、ミッターマイヤーもそれを妨げる気にはならなかった。それどころか、この男の話をもっと聞きたいという気持ちさえ沸き上がっている。

制服姿のミッターマイヤーが軍人であること、しかもかなり階級が高いこともわかつているだろうに、それに対して媚びへつらうような様子もない。ミッターマイヤー自身も公人としてここへ来ているわけではないのだから、男の自分に対する扱いに腹を立てるといふより逆に好感を持つほどだった。

「ああ、俺ばかり話してしまったな。何か探していたのでは？」

「薔薇を探していたんだ。ユリウスという名前のついたやつを。どこで見なかったか？ 赤い薔薇だ」

「その名前、見た記憶があるぞ……」

きよろきよろ辺りを見ていたが

「ほら、そこにあるのがそうだ」

すぐ近くの足元を指さした。

「これが？」

確かに赤い花がある。しかし背は低いし、他の花の花壇の縁飾りとして植えられているようだ。

「これも薔薇なのか？」

確かに『ユリウス 種類…ミニアチュア・ローズ』という名札がつけられている。

花の色は赤い。血のように紅い花だった。

「薔薇は種類が多いからな」

「それにしても」

「ああ、いかにも薔薇というのを想像していたのか」

なんとなくユリウスの気持ちがわかるような気がする。花卉が幾重にも連なり、香り高く大輪咲き誇る薔薇を想像していたに違いない。

小さなカードには名前の他に、種類と年度、製作者の名前が書いてあった。

「ルードヴィツヒ・フォン・エーベルバッハ……」

ミッターマイヤーのつぶやきが聞こえたのか、男は

「そいつは品種改良が好きらしい。薔薇園の方にたくさん植えてあった。いかにも薔薇といった雰囲気やつが」

そう言って同じように屈み込んだ。

「こんな花も作れるのか……」

小さな紅い花を感慨深い表情で見つめる。

「ありがとう、いろいろと助かった」

「そうか？ 役に立てたのならいいが」

立ち上がったミッターマイヤーが手を差し出したのにあわてて、男も立ってその手を握り返した。

「よければ名前を……ああ、俺は」

名乗ろうとすると

「いや、今はいい。俺はかなりの野心家だね。名乗るのはそれなり

の場で、それなりの地位の得てからでいい、中将閣下。その階級章は確か中将だったな」

「そうか」

ミッターマイヤーは笑みを漏らす。

相手が中将だということも知りながら、あえて名乗ろうとしないこの男の野心がどのようなものであるか、興味を感じたものの尋ねても応えてくれないこともわかっていた。

再び熱心にスケッチを始めた男——後に工部尚書と首都建設長官を兼任して「獅子の泉」^{ル・ヴァン・フルン}の建設を担ったブルーノ・フォン・シルヴァーベルヒの若い日の姿だったのである。

ミッターマイヤーは今度はすぐに目当ての花を見つけることができた。

薔薇園の中でもとりわけ目立つ場所にその花達はあったのだ。

色こそ様々であるが、どれも皆格調高い剣弁高芯咲きのもので、そり返った花びらが高い花芯を包み、香りも際立っている。

誰が見ても薔薇そのものだった。

他の花の縁飾りに使われていた小さな薔薇もそれなりに愛らしくはあったのだが、これらと比べると本当に同じ薔薇なのかと思えてくる。薔薇園なのだから回り中薔薇ではあるのだが、その他の花を圧倒して咲き誇るエーベルバッハ一族の花——

ユリウスはおそらく何度もここへ足を運んでいたに違いない。

そして、この中に自分も入る日を夢見ていたのだ。

名札を見ていたミッターマイヤーは『ルードヴィッヒ』と付けられた花を見つけた。

神秘的な蒼い薔薇がそれだった。

（これがユリウスの父親なのか……）

別にその薔薇が実の親でないのはわかっているが、しかしミッターマイヤーの目はその蒼い花に釘付けられる。

青い薔薇を作るのは至難の技だと聞いたことがあった。土や水に手を加えることで一時的に青い花びらを作ることとはできても、品種

そのものとして青く咲く薔薇を作るとは誰にでもできることではないと。

薔薇作りを趣味にする貴族は少なくないが、おそらくここまで鮮烈で美しい蒼を作り出した者はいないだろう。

白の中にほんのり水色が混じったような花があった。名前は『ウィルヘルム』となっている。品種登録された年度から推測するに、ルードヴィヒの祖父か曾祖父らしい。

また『ハインリッヒ』という薄い空色の花もあり、そうやって探してみると、青味があった薔薇はすべて男名がつけられていた。

エーベルバッハ家の当主は青い薔薇で現されとしたら——
シュマーレンの言っていた、がっかりしたような、不思議そうだったユリウスにも納得できる。

他の花の引き立て役に使われるような小さな花であったこと、それから当主の印の青い薔薇ではなかったこと。

そう都合よく青い薔薇の新種が出来ないと考えることもできるが、だとしたら色は異なっても一族の他の者と同じ剣弁高芯な花でもユリウスは十分満足したに違いない。

すぐ近くに先日ミッターマイヤーが買ったロイヤルハイネスの気品あふれる姿があった。

「そうか……同じハイブリット・ティーという種類なのか」

種類はおろか、名前さえ知らずに買っていたのだから仕方がない。ふと気づいて先程の所へ戻ってみた。スケッチしていた男はいなかったが、ユリウスは同じ場所に可憐に咲いている。

品種登録されたのは一〇年前だった。

（シュマーレンの話では花を見たのは少なくとも士官学校時代のはずだ。エーベルバッハ家が薔薇を作る一族であることも、皆が名前のついた薔薇を持つこともその前から知っていたろう。あえて教えてなかったのだろうか？　ここならばまずわかりはしない。俺がこの花を見つけることができたのは偶然でしかない）

何故父親があんな薔薇に息子の名前を付けたのか、またそのこと

を一〇年近くも黙っていたのか、解けた謎もあれば新たな謎も増える。

閉店間際の売店で、ミッターマイヤーは何かの参考になるかも知れないと『薔薇の歴史』という本を購入した。写真も多く掲載されているし、薔薇の交配についても簡単な説明があったからだ。

それから少し考えてエヴァンゼリンにと小さな花束を作ってもらった。

植物園を出た所でロイエンタールが待っていた。

「ここへ寄るといふ話を聞いたのだな」

「それでわざわざ迎えに来てくれたというわけか」

「ご挨拶だな。人が苦勞して検死結果を探り出してきてやったというのに」

車に乗るのを止め、二人並んで柵のそばを歩く。

「わかったのか？」

「ああ、待ったがかかる前に検死は済んでいたからな。もっとも検死官の口を開けさせるのには随分と手間がかかった」

「それで？」

ロイエンタールはすぐには答えようとしなかった。

少しの間は黙ったまま横を歩いていったミッターマイヤーは、その険しい横顔からだいたいの状況を察する。

「……助かったんだな？」

ふいに立ち止まった金銀妖瞳は、遙か前方を見つめている。

「ああ……すぐに手当すれば死んだりするような傷ではないと。おそらく刺されて小一時間は生きていたろうと」

ミッターマイヤーはゆっくりと息を吐き出した。

深くコートの前を合わせ、回りの誰にも苦しい息を気づかれないよう、声をあげないようじっと堪えていたユリウスは手を伸ばせば届きそうな距離に立っていたのだ。

「薔薇は見てきたのか？」

再び歩きながらミッターマイヤーは、エーベルバッハ一族とは離

れた場所にあった小さな赤い薔薇のことを、青い薔薇がおそらくは当主の印であろうことを話した。

「エーベルバッハ……聞いたことがあるな。エーベルバッハ伯爵家の当主は代々薔薇作りの名人だと。とりわけ当主の名のついた青薔薇は絶品だと……」

「だがユリウスは一人違う種類の紅い薔薇だった」

「違う種類……つまりハイブリット・ティー系ではなかったんだな」

「ああ、ミニアチュアという種類だった。一〇年前前に登録されている」

ミッターマイヤーは買ったばかりの『薔薇と歴史』を開いてみせた。その花は載っていないが、他の同じミニアチュア系の薔薇が、可憐な花を咲かせている写真がある。

「ちょっと見せてくれ」

ぱらぱらとページをくついていた手が止まった。

「どうした？」

薔薇の系統図の部分を開いて見せる。

「ほお、馬と似ているな……」

どんなに広がった馬の血統図も、さかのぼればわずか三頭の馬になるのと同じように薔薇の原生種もそう多くはない。

「だが、結局今作られている品種の多くがハイブリット・ティー系で、他のものはほとんどない。他の系統のものも結局はハイブリット・ティーと掛け合わされて、全体が一つの種類になってしまったに近い」

ミニアチュアはその系図の途中にぽつんと取り残されたようにあった。

「ユリウスが外腹だから外したのだろうか……？」

「だがシュマーレンの話が事実だとすると、ユリウスはエーベルバッハ家を継ぐことになっていた。正妻の子以外の者が継ぐのはそう珍しいことでもないさ」

「つまり、それがミニアチュア系の薔薇を選んだ理由にはならない

ということか」

「ああ、俺ならば逆なことをする。一族の誰にも何も言わせず、他のどの花よりも豪華で鮮やかな青薔薇を選ぶ。上手く色が出なければ、他の花の名前を付け変えてでもな。伯爵家の当主ならばそのくらしい力はある……そうでなければ支えられはしない」

「お前の家はどうかんだ？　ロイエンタール家は」

「俺の家？　あんな下級貴族、どうなろうと誰も困りはせん」

乾いた笑い声が響く。

「さっさとなくなってしまう方が世の為だろうな」

自虐的な笑みと共に本を閉じて返す。

「伯爵家の方は俺が調べてやろう。ところで……」

ふと気づいたように指さした方向にホテル・シェーンブルンが見えた。

「あのホテルか？」

「ああ、そうだ」

「エレベーターが動いているのが見えるな」

細長い建物の中程に小さな明かりが昇っていく。

「ここから見えるということは、向こうからも見えるだろうな。もちろんはつきりとは無理だろうが……」

ロイエンタールの意図する所——あそこから、ここを見ようとしていたのではないか、それに同意しつつも言葉にできないミツターマイヤーだった。

土産の花束にエヴァンゼリンは喜び、食卓にそれを飾った。

「私どちらかというと、こんな小さな花の方が好きなんです。もちろんこの前あなたが贈って下さったピンクの薔薇も素敵だと思いますけれど」

「あれはロイヤルハynesという名前なんだ」

テーブルの隅においてある本を指さす。

「種類はハイブリット・ティーだそうだ」

普段ならまず夫が買いそうもない本を手に取り、中を見た。

「薔薇ってたくさんあるんですね。色も形も……あら、青い薔薇」
エヴァンゼリンの視線が止まる。

「気になるか？」

「私、まだ実物を見たことはありませんから」

「確かにそこらの花屋にはないだろう。今度見に行くか？ 植物園にはあったぞ」

「いいえ、けっこうです」

本をテーブルに戻す。

「薄い水色なら前にも写真で見たとありますけれど、こんなに深い色の薔薇は……なんだか怖くて」

「怖いとは？」

「だって……普通自然にこんな色の花は咲かないでしょう？ 作るにしても人間技でないような、作った人の執念のようなものがこもっている気がして」

ミッターマイヤーもそのページを開いて見た。

ユリウスの父親の作った薔薇。ここまで濃い蒼を作り出した者はいないと注釈に書いてある。

（執念か……そうだな。確かに並大抵のことではあるまい）

この薔薇を見て、この薔薇に憧れてユリウスは過ごしてきたに違いなかった。

（しかし青ではなく深紅だった……しかも明るい赤ではなく、まるで血のような……！）

血という連想と、ロイエンタールが言っていた他の系統のものも結局はハイブリット・ティーと掛け合わせしているという話が、ただ一人ミニアチュア系だったユリウスと重なった。

いそいで薔薇の系図の書かれているページを探す。

幾つもの枝葉に別れているものを指で辿る。

（まさか……？ いや、これが動機か？）

翌朝、いつもより早くミッターマイヤーは家を出た。導き出した

自分の推理を、一刻も早くロイエンタールに聞いてもらいたかったからである。昨夜連絡を取ろうとしたのだが家には戻っていなかったのだ。そのことはそう珍しいことでもなく、また真夜中まで試みていたわけではないので、帰りが遅かったのだろうと単純に考えていたのである。

しかしいくら待ってもロイエンタールは元帥府には姿を現さなかった。

「ミッターマイヤー中将、お電話です」

いらいらして室内を歩き回るミッターマイヤーに従卒がすまなそうに声をかける。

「誰からだ」

「それが……声も聞き取りにくいのですが、画像の方も……」
「どうした」

それは単に受信状態がよくないとか壊れているのとは違い、それは明らかに意図的なものだった。

TV電話は便利な反面、必要以上の情報を相手に与えることがあり、わざと画像を送ってこないことも少なくない。

「ロイエンタールか？」

直感だった。

受信機から返事はなく、息遣いだけが聞こえてくる。「おいっ、ロイエンタール！」

「……聞こえている」

何度か叫んだ後によりやく微かな返事があった。ほとんど息の音に埋もれていたが、それでもミッターマイヤーの耳はきちんと親友の声を聞き分けた。

「無事なのか？」

「今の、ところはな……」

再び声は途絶える。

雑音が多いのは通信機のせいではなく、盗聴を防ぐ為に細工がしてあるからであろう。

抑えようとしてはいるが、苦しい息を堪えることは困難で、ミッターマイヤーがホテルの名を確認するのには数分を要した。

(……ロイエンタールは負傷し、昨夜は家にも帰っていない、今も潜伏している)

(あの馬鹿、わかっていて……)

昨日それに気づかなかった自分の愚かさを呪う。

(殺人事件をもみ消すほどの力を持つ伯爵家に探りを入れようとしたらどうなるか)

自分と妻の為に、あえてロイエンタールは危険な役を引き受けたのだ。

(このまま引き下がってたまるものか……)

己に対する怒りと伯爵家に対する怒りが入り交じり、ミッターマイヤーの拳が壁を打つ。

手早く必要そうなものを揃え、尾行のことを考慮してビッテンフェルトに適当な用事を作って車を出させ、こっそり同乗させてもらい、なんとか元帥府から出ることに成功した。

「いい歳してスパイごっこか？　まあ、なんでもいいが、今度奢れよ」

大ざっぱといってしまうばそうなのだが、この男の豪気で闊達なところはうらやましいほどである。いきなりの妙な頼みに、あれこれ詮索せずに応じてくれたこともありがたかった。

途中で車を降り、迷路のような狭い路地を進む。

いかにもうさん臭そうなホテルでカウンターのベルを鳴らすと、それに似合った細身の男が面倒くさそうに姿を現した。

「泊まりか？」

無遠慮な視線ではあるが、単にそれだけではない。一流ホテルのフロントとはまた違った意味での人を見る目というものが養われている視線だった。

「俺はウォルフガング・ミッターマイヤーだ」

客ではないとわかると、つまらなさそうに舌打ちしてカギを差し

出した。

「三階の奥だ」

ぎしぎし音を起てる階段には血を拭きとったらしい跡が残っている。

「俺だ、ロイエンタール」

一応扉をノックしてみたが応答はなく、渡されたカギを使って扉を開け室内へ入った。

最初に目に入った床の上のおびただしい血痕に、自分が青ざめてゆくのがわかる。

「……ロイエンタール」

口の中が乾いて舌が上顎から離れず、名を呼ぶ声は擦れた。

ベッドと窓の間で壁にもたれて座り込んでいるロイエンタールを見つけても、駆け寄ることができない。

近づく気配を感じたのか、うつすら目が開いた。

「……遅かったな」

シャツがまるで染めたように見える。

幾重にも巻き付けられた布から血が滲み出ており、傷の深さが察せられた。

「すぐ来ようとは思ったのだが、こちらにもいろいろと事情があるんだ」

さりげなく応えようとしたが、声の震えを抑えることはできなかった。

「どうなんだ？ 痛むか？」

青白い顔がにやりとする。

「ああ……まだ、生きてはいるようだ」

「なるほど、死人はしゃべったりもしないしな」

傍らにひざまずき慎重に傷の具合を見て、止血が完全なことを確かめ、持って来た救急道具を使って処置をした。右上腕をかなり深く切りつけられており、動かすとひどく痛みを伴うようなので、ひじを曲げさせたまま体に固定する。

やがて鎮痛剤と増血剤の効果で呼吸も楽そうになり、ミッターマイヤーはようやく安心した。

「この部屋を見た時は死んでいるかと思ったぞ」

「そう簡単に殺されては困る」

「だが……」

大量出血のせいで冷たくなっている左手を、包むように両手で強く握る。

「本当なら俺が……すまない。すぐに気づくべきだった」

「お前のせいではないさ」

握り返してくる手がわずかではあるが温もりを取り戻しつつあるのを感じ、ミッターマイヤーは言葉に詰まった。もしかしたらこの手は、この身体は冷たかったかも知れなかったのだ。

「……やはり、俺が——」

まだミッターマイヤーが何か言おうとするのを視線で塞ぐ。

「それにしても、我ながら間抜けなことをした……向こうも殺すつもりはなくて、少し脅すくらいに考えていたのを、俺が捕まえようとしたのがまずかった」

立ち上がろうとするのを助け、椅子を取って来て掛けさせる。

「俺も驚いたが、相手の方がもっと驚いていたな。動脈を擦ったらしく血が噴き出て、叫び声をあげて這々の体で逃げて行った。本当なら声をあげるのは俺のはずなのにな」

「まだあまりしゃべるな。何か食べるか？」

「それはありがたいが……先にシャワーを浴びて着替えたい」

やれやれというようにミッターマイヤーは首をすくめた。

「むちやを言うな。着替えなら持って来たから体を拭くだけで我慢しろ」

「用意がいいな」

「ただし、ビッテンフェルトの物だからな。俺のではサイズが合わないし、だからといって買い揃える時間はないし。まさかお前が着るとは思ってないだろうが、すんなり貸してくれたし元帥府が出る

のにも協力してもらった」

「なるほど……このさい誰の服でもないよりはマシだ。たとえばあの参謀長の物でも、シャツはシャツだしな」

「それは残念だ。オーベルシュタインは運悪く外出中だったんだ」

「運良くだろう？」

「お前にとってはな」

ようやく軽口を叩く余裕も出て、着替えが済む頃には多少顔色もよくなった。

「酒はないのか」

「あったとしても今は飲ませんよ」

これもやはり買い物をするわけにはいかなかったので、本当にあり合わせの物である。そこら中血だらけで視界に入れることを避けることもできず、それはできたとしても臭いはどうしようもなかった。

とても食欲が沸くような状態でも状況でもないだろうが、ロイエンタールはよく食べた。

「なかなかいいホテルだろう？」

階下に電話して頼んだ味も香りもない、ただ熱いだけのコーヒーを飲みながらロイエンタールは自慢そうに言った。

「ああ、確かにいいホテルだ」

コーヒーを運んで来たさっきの男は、部屋の中を見ても驚いた様子もないし、文句を言うわけでもなかった。昨夜ロイエンタールがシーツを切り裂いて止血したのでベッドの方もなかなかすさまじい状態になっている。床と壁に染みた血を拭きとって消臭剤を用いても、とても今晩は客を泊められそうもない。

「なんとって帝都の一流ホテルの三倍だ」

「いい電話もついているしな」

「外にも血の跡はなかったらう？」

深夜血まみれの男が転がり込んで来ても、何ら動じることなく、カウンタ―に金をおいたロイエンタールにカギを差し出し、表もサ

ービスしてやると言った。ウォルフガング・ミッターマイヤーという男が来た時だけ通すように言った時も、聞き返しもせずつまらなさそうにうなずいただけだった。

「あと倍出せば医者を呼んでやるとも言われたが、さすがにそこまでは持ち合わせがなかった」

笑うと傷が痛むらしく顔をしかめる。

「ところで、昨日気づいたのだが……」

持って来た『薔薇の歴史』の本をテーブルに広げた。

「薔薇の品種は確かに多い。三万とも四万とも言われているそうだが、系統図として見ると原生種から交配されていくつもの枝に分かれながらも、最終的に最も作られているものは、すべてハイブリット・ティー系に関係している。木薔薇と呼ばれるものはすべてハイブリット・ティーに結び付く。だが」

ミニアチュア系から伸びた線を指でたどる。

「ポリアンサ・ローズとシネンシス・ミニマを交雑して出来たミニアチュアはそれで終わりだ」

「なるほど、ポリアンサ・ローズはハイブリット・ティーと掛け合わせてフロリバンダ系になり、シネンシス・ミニマの基のコウシンバラから生まれたティーローズと、ハイブリッド・パーペチュアルを交雑させて出来たのがハイブリット・ティー・ローズ……つまり、ミニアチュアは木薔薇の中にありつつも、系統が完全に異なるというわけか」

「ああ、観賞用薔薇としては系統図に入れないこともあるそうだ……どう思う？ ユリウスが知らないと思うか？」

「外腹だからハイブリット・ティーではない、ということではなく、最初から一族ではないという意味のミニアチュアか……」

「あの薔薇を見た時、ユリウスはそれを悟ったのだろう」

本を閉じると同時に、ミッターマイヤーも瞳を閉じた。

「俺は恐ろしい想像をしている……ロイエンタール」

「犯人はエーベルバッハ伯本人、か？」

ロイエンタールはあつさりそう言い、低く笑った。

「そう考えれば辻褄が合う。ユリウスが甘んじて死を受け入れたわけも、その時間は十分ありながら犯人を知らせようともしなかったことも……そして動機も、だ」

「それもなかなか良い推理だが……では、卿はユリウスはエーベルバッハ伯の子供ではなかったというのだな」

ミッターマイヤーは不可解そうなグレーの視線を向ける。

「息子だと信じて目をかけていたのが、実はそうではなかった。裏切られたという気持ちは大きいだろう。殺意を抱いたとしても何ら不思議ではない。だが、それを伯爵が知ったのは何時だ？ 昨日や一昨日ではあるまい？」

息を呑むミッターマイヤーを見るロイエンタールは楽しそうできえあった。

「あの花がユリウスと名付けられたのは、確か一〇年前だと、お前が言ったではないか。つまり伯爵は一〇年も前から知っていたわけだ。知ってはいたが、殺意を抱いたのは最近……そういう可能性もまったくないわけではないがな」

ロイエンタールはベッドの上に放り投げてあった血でごわごわしている上着の内ポケットから紙片を取り出す。

「こいつを探ったせいで死に損なった」

ミッターマイヤーの前に一枚の写真を突き付けた。

「ルードヴィッヒ・フォン・エーベルバッハ伯爵だ」

「……まさか」

「まさかも何も、間違いないさ」

引ったくるようにして写っている男の顔を凝視する。

「そんなに似ているのか？」

「ああ……瓜二つだ」

「父親似だったのか。まだ続きがあるぞ。ルードヴィッヒも外腹だったそうだ。ユリウスの場合とは違い、男子は別にもいた。兄や弟を押しつけて、外腹が伯爵家を継いだというわけさ」

「そんなことが……」

「誰が生んだ子供でもかまわなかったわけだ。必要なのはエーベルバッハ家を継ぐだけの度量を持った男、薔薇の一族の名に恥じない品種を作ることのできる男だったのさ」

「それである薔薇を作ったルードヴィッヒが伯爵家を継いだ……」

「兄弟の妬み嫉みは激しかったろうな。とはいえ伯爵家の当主の決めたこと、そしてあの薔薇を見ればどんなに悔しくともルードヴィッヒを認めないわけにはいかなかった。その悔しさから伯父達が結託してユリウスを葬った……そうすれば自分らか、あるいは子供が伯爵家を継ぐ可能性も出てくるからだ。最初はそう思ったのだが、どうも話はそんな単純なものではないようだ……」

テーブルに置かれた伯爵の写真を指し

「俺はユリウスの顔を見たことはないが、間違いなく親子らしいかな」

その言葉の意味を察したミッターマイヤーは見る間に青ざめた。少しでも気を落ち着けようと冷めかけたコーヒーに手を伸ばす。しかし手の震えを止めることはできずに、カップの中で黒い液体が波打ち、ミッターマイヤーのズボンに染みを作った。

「……察しがいいな」

ロイエンタールの声も沈んでいる。

「ついでにこっちも見せてやろう」

エーベルバッハ家の家系図にはある記号が書き込んであった。

「……これ、か」

そのまま絶句する。

「人を殺すくらい、わけないだろう……？」

ぞっとするような響きを伴った声ではあったが、それ以上に、伯爵家の、貴族という人間の恐ろしさにミッターマイヤーは恐怖した。

薔薇の名前(3)

咲き乱れるつる薔薇の絡まった門は静かに開かれた。元帥府の地上車は伯爵邸に向かつて進む。大小様々な薔薇がどこまで続くとも思われる道の両側に咲き誇っていた。

「悪いが車の中で待っていてくれ」

どうしてもビットンフェルトに妙な頼み事ばかりすることになる。自分が貸した服をロイエンタールが着ていることも、負傷しているらしいことも、二人が何やら勢いこんで伯爵家に乗り込もうとしていることも、彼にとってはすべてが謎である。

「いやあ、悪いなあ、ミッターマイヤー一人だと思ってたら、卿にまで奢ってもらえるとは」

それでもビットンフェルトは大笑して車を降りる背中をどんと叩き、ロイエンタールにうめき声を出させただけだった。

二人とも導き出したものが正しい自信はあった。だが物証があるわけでない以上、警察に話しても真面目に取り合ってもらえないのはわかっている。それどころか逆の効果が起こり兼ねない。

探ろうとしただけでこの有り様では、秘密を嗅ぎ当てたとなれば——自分の身ならば何としても守ることはできてもエヴァンゼリンのことを考えると、これはどうしても早急に伯爵本人と話をする必要があった。今はミュラーに頼んで家の回りを警戒させているが、これを一生続けることはできない。

ビットンフェルトを同行させ、白昼堂々正面玄関から伯爵邸を訪問する。中將が三人も行方不明となれば、いくらエーベルバッハ伯爵に力があるうとももみ消しは難しい。もし自分らに万が一のことがあれば、ラインハルトに伝えるように取り計らってある。

エーベルバッハ伯爵が薔薇の一族として皇帝の庇護を受けていたとしても、ラインハルトも継いで間もないとはいえ同じ伯爵なのだ。そして帝国元帥でもある。

「あの方の手をわずらわせたくはないが」

通れた部屋で二人は小一時間待たされた。

香りのよいコーヒーが出されたが、とても口を付ける気にはならない。

「悪かったな、当てにならん下級貴族で」

「おいおい、そんなつもりで言ったわけじゃないぞ。それにしても、ビッテンフェルトの奴、怒っているだろうな」

「あいつのことだから高いびきで寝ているだろうよ」

「やれやれ、こいつはずいぶんと高いものにつきそうだ」

もしかすると生きて帰れないかも知れないというのに、何故か不安はなかった。この部屋に通される前に念入りに調べられて、二人とも武器になるようなものは何一つ身につけていない。

「こちらへどうぞ」

ようやく通された次の間でもたつぷり十五分は待たされたに違いない。

「お待たせして申し訳ない、私がルードヴィッヒ・フォン・エーベルバッハだ」

実用的な家具としてだけでなく、調度品としても立派な机にいた男はすさまじい威圧感を発していた。ラインハルトの持つものとは異なるが、やはり人を引き付ける力、圧倒する力を持っていることがわかる。

「ウォルフガング・ミッターマイヤー中将だ」

差し出した右手を握り返すルードヴィッヒの手はおよそ貴族の手とは掛け離れた、ごつごつした堅い感触をしていた。

「貴族はワイングラスより重いものを持たないと思ったかね。残念ながら私は肥料の袋を自分で運ぶこともある」

「オスカー・フォン・ロイエンタール中将だ。左手で失礼させてもらおう」

ロイエンタールはもったいぶってそう言うと、いかにも大儀そうに左手を差し出す。

「怪我をしたのかね？ 軍人はいろいろ大変だろう。体は大事にしてくれたまえ」

当てつけるようにわざと強く握ったが、伯爵は動じる様子はない。

「それで私に話とは？」

ゆったりと背もたれに寄りかかり、机の上においた指輪の一つもしていない指を組む。

何の話をしに来ているのかわからないはずはない。

だが二人も性急に事を進めるつもりはなかった。

突然結論を突き付けてもルドヴィツヒがそれを認めるはずはないのだ。

「つい先日が、私の四回目の結婚記念日でした」

「それはそれは、私からおめでとうを言わせてもらおう」

間髪入れずにルドヴィツヒは言い、好意的な中に巧妙な探りを入れた視線を向ける。

「私は妻の為に薔薇を、ロイヤルハynesを買って食事の予約をしたホテルへ向かいました」

「ロイヤルハynesか……あれはいい花だな。形といい香りといい、ティー系の魅力を十二分に兼ね備えた花だ。うちの薔薇園にも――」

「少し黙っていてはもらえまいか？」

ロイエンタールがじろりと睨んでも悪びれた様子もなく

「ああ、すまない。私は薔薇と聞くとつい口を挟みたくなるのでな」
続けてくれと手真似する。

「最上階のレストランへのエレベーターの中で一人の男が死にました。ユリウス・ベルンハルト・ヴィクトリヒという名の私の部下が、そしてあなたの最愛の息子でもあった男が」

そこでわざと言葉を切り、伯爵の反応を見る。

だが伯爵は目を閉じ、二人の視線を遮断していた。

「いかにも……あれは私の息子だ」

やがて応えがあった。

「この世にただ一人の息子だ……」

ルードヴィツヒは深く静かに息を吐く。閉じられたままの瞼は微かに震えていた。

「あれに家督を継がせる為に、私はこれまで生きて来たのだ」

「———だったら、なぜっ！」

机越しに伯爵につかみかかろうとするのを制し、ロイエンタールが一步前に出た。

「あなたには兄も弟もあった。なのに外腹だったあなたが伯爵家を継いだ」

「ああ、そうだ。私こそが当主にふさわしいと、父がすべてを私に託したのだ」

「ご兄弟はさぞかし悔しがったでしょう」

「だろうな……もう何年も会っていない。会う必要はないし、互いに顔を見たくもないしな。飢え死にさせるわけにもいけないので、相応の金はやっている」

伯爵は立ち上がり、窓まで歩くとレースのカーテンを開ける。どこまでも続く薔薇園と、そこで働く人々の姿が見えた。

「いかに伯爵家といえども何代にも渡って財産を分けていれば、いつまでも昔のままの栄華を誇っているわけにはゆかぬ。しかし貴族としての体面もある。兄や弟では到底伯爵家をもり立てていくことは不可能だった。父はそれを知っていたからこそ」

「一番蒼い薔薇を作ったあなたに相続させた……」

「そうだ」

「正妻の息子ではなく、あなたに」
ロイエンタールは殊更それを強調する。

「別に、そう珍しいことではない」

「ユリウスのように、ただ一人の男子というのであれば……まさか薔薇作りの腕前で跡継ぎを決められるとは、外腹のあなたに伯爵家をさらわれるとは、誰も考えてはなかっただろう」

「仕方あるまい。金を浪費するしか能がない奴らに伯爵家を継がせるわけにはいかなかったのだ！」

二人に背を向けたまま伯爵は強くカーテンを握る。そのまま下に体重をかけて引いたので、上の留め具が外れふわりとレースが伯爵に被さってきた。

「謎は二つあった。なぜ手当をすれば助かったユリウスが死を選び、また犯人の名を明かさなかったのか。それから動機……いや、動機ならある。またしても外腹のユリウスが伯爵家を継ぐことに對しての反発という動機が。人一人を殺すには十分値する動機だ」

「では犯人は私の兄か弟だと……？」

白いレースの下で伯爵はほくそ笑む。

窓辺に伯爵が立っているのを見つけた園丁が深く頭を下げ、それに応えて手を振りながら

「そうかも知れんな」

つぶやく声には嘲笑が入り混じっていた。

「あの薔薇を見なければ、俺はそう思っただろう」

ミッターマイヤーは近づいて乱暴な仕草でカーテンをむしり取る。

「俺は見て来たんだ、ユリウスという名の小さな薔薇を……血のよう紅い薔薇だ」

「……」

殺氣立ったルードヴィッヒの視線を正面から受けてもミッターマイヤーは怯まなかった。

「一族の家系から外された種類だった。そして当主の証しの青い薔薇でもなかった。俺は、最初ユリウスは伯爵の子供ではないのだと思った。だから彼があなたに贈った成績優良者の記念品を、あなたはあのような形で彼に返したのだ。敬愛するあなたが自分の死を望んでいることを知り、理由はわからないが、そこまでのあなたの心情を思い、あなたの為に死を選んだのだ」

「……言っていることの意味がよくわからんな」

「あなたと彼が親子でないと誰が思うだろう。これほど似ている父

子は滅多にいない」

反対側から近づいたロイエンタールがエーベルバッハ家の系図を広げ、目の前に突き付ける。

「よく見ろ。それなりの代償を支払って入手した貴重な代物だ」

胸ぐらをつかんで椅子に座らせると、家系図を机の上におく。在り来りな家系図だが、そこにはロイエンタールが書き込んだ記号があった。

「あなたの血液型はA型で、ユリウスの母親はO型だ」

「……それがどうしたというのだ？ ユリウスはO型だ。別に不思議なことではない……」

「顔色がすぐれないようだが？ 伯爵」

ロイエンタールは冷たく言い放つ。

「だが、先代のエーベルバッハ伯ハインリッヒはAB型、そしてあなたの母親も同じAB型……これをどう説明する？」

ルードヴィッヒは顔を覆った。ロイエンタールはその耳元に口を近づけ

「AB型の両親からA型の子供が生まれる。これは何の不思議もない。また、A型とO型の両親から生まれた子供がO型ということもある。ただしその場合のA型はAOの遺伝子を持ってなければならぬ。またAB型の両親より生まれたA型の子供の遺伝子はAAであるはずだ。つまり、あなたがエーベルバッハ伯ハインリッヒの息子であれば、ユリウスの血液型は必ずA型になるはずなのだ！」

うめき声をあげて家系図が引き千切られる。しかしミッターマイヤーは容赦なくルードヴィッヒを引き起こした。

「最初あなたはユリウスは自分の子供ではないと思った。一〇年前だ。そしてあなたはミニアチュアにユリウスの名をつけた。だが心の奥底では信じていた気持ちがあった。自分が裏切られているとは思いたくなかった。実際そうだったのだから。年と共にユリウスはあなたそっくりになった。どこの誰が見ても親子だとわかるように」

「……貴様らに何がわかる」

声が絞り出される。千切れた家系図を握り締める手は震えていた。「あれがそんなことができる女でないことはわかっていた。だが、他にどうすれば説明がつくのだ？　だから私はあの薔薇にユリウスという名を付けた、誰にも内緒で。言うことはできなかった。ユリウスが生まれた時、私は喜び伯爵家を継がせると一族の者に宣言していたからな。もし我が娘を跡継ぎにしようとして妙な手出しをしようものなら私は許さないと、娘達には相応のことはするつもりだとも言ったのだ。今さらあれは私の息子ではなかった、女に裏切られていたなどとどうして言える？

娘は大勢いたが、息子はあれ一人だった。どの子よりも愛しかつた。一緒に暮らせぬ分、愛情を注いだ。日に日に私に似てくるのを見てみると、私の息子でないはずはない、そう思うようになった。そして気づいたのだ……間違っているのは私の方なのだ……私こそが伯爵家の血を引いてないのだと……そして、それを証明するものが、私の血を分けた最愛の息子なのだ……」

再び窓辺に立ち、眼下に広がる薔薇園を見つめる眼差しには愛情と狂気が混濁している。

「思い当たることはあった。私自身は父親には似ていなかった。父は、お前は母親によく似ていると言い、伯爵家を継ぐのは誰よりも薔薇を愛し、家を護っていける者だと……父は私が伯爵家の血を引いていないことに気づいていたのかも知れぬ。だが、私が誰よりも後継者として相応しいと思い、父はすべてを託してくれた。だとすれば私がするべきことは何だ？　やはり一番相応しい者に後を継がせることではないか。一時はそう思いもした……だが、もしユリウスから私が伯爵家の血を引いていないことが露見したならば、伯父らは黙ってはおるまい。私がいなくなればこの家はどうなる？　あの薔薇達、薔薇園で働く者らは？　自分の子供ではないかも知れないと思いつつも、あえて私を後継者に選んだ父の想い……それに応えた私の血の滲むような努力はどうなるのだ」

エーベルバッハ伯爵家は、貴族の中でもかなりの名門として名が

通っている。

その当主の、貴族にらしからぬ日に焼けた肌、たくましい筋肉のついた身体、節くれ立った無骨な手は、彼がこれまでどのような生活を営んできたかをあらわしていた。

「大事な話があるからと呼び出し、あのホテルの近くの公園で会った。夜はほとんど人通りがないことは調べておいた。ユリウスは来た。そろそろ正式に伯爵家の跡取りとして披露しなければならぬ年齢だったから、その話だと思ったのだろう。逆に私はだからこそ急がねばと——もし、他に男子が生まれれば……私はこの一〇年間ずっとそれを願っていた。そうすればユリウスを後継者にしなくてもいい、単なる外腹の子供として、生涯血液型のことさえ伏せておけばよい。あれほど決意して行ったにもかかわらず、私には殺すことはできなかった……ほんの少し、服を裂いて切っ先が埋まった程度だった。私は泣いていた。一瞬ユリウスは不思議そうに、信じられないといった表情で私を見て、それから……それから、私の手に自分の手を重ねて——」

とうとうルドヴィツヒは言葉が続けることができなくなり、その場にひざをついた。

「……ユリウスは自らを突いたのだな？」

返事の代わりに嗚咽があった。

「そしてあなたが逃げる間は、彼は生きていようとした。あなたの為に、あなたが愛した薔薇の為に……そして、あのホテルの展望エレベーターからあなたの薔薇を見ながら死んでいったんだ」

実際には夜間照明があったとしても花まで見えるはずはない。しかしユリウスが立っていた場所は、まさにその為としか考えられなかった。

「……覚えていたのか……まだあれが幼い頃、一度だけ、一緒にあのエレベーターに乗ったことがあった」

そのまま沈黙が続いた。

伯爵は石のように床にうずくまったまま動こうとせず、またそれ

を見守る二人も掛ける言葉を持ってないままだった。

ふいにベルが鳴り、その音に引かれるようにルードヴィツヒは立ち上がる。

「……私だ」

何事もなかったかのように短いやり取りをした後、静かに受話器を置いた。

「それで？ お前たちの望みは何だ？」

椅子にかけたルードヴィツヒは、完全に落ち着きを取り戻している。それが今の電話と関係していることは明らかだった。

「真実が知りたかっただけだ。それと」

ロイエンタールを意味ありげに見る。

「ああ、もう手だしはさせん。最愛の奥方にもな」

笑って言うルードヴィツヒに、新たな恐怖を覚えるミッターマイヤーだった。

「さっきの電話はなんだったんだ？」

「ああ、たいしたことではない。新しい品種の登録が済んだという連絡だ」

引きだしを開けて資料を取り出す。

「見るかね？ 私の自信作だ」

その薔薇の写真と名前を見た二人は息を呑んだ。

それは蒼い薔薇だった。深く蒼いミニアチュアで名前は『ユリウス87』

「そのうち誰かが気づくと思っていたが……まさか、な。まあいい、すべて過ぎたことだ。私はこれさえ確認できれば……もう未練はない」

「伯爵……あなたはまさか——」

「きれいな蒼だろう？ ここまで澄んだ色を出せたのは初めてだ」

うっとり写真を眺め入るルードヴィツヒが何を考えているのか、熟知しながら二人は黙って部屋を出るしかなかった。

「遅いっ、遅すぎるぞっ！」

待ち疲れたビットェンフェルトが二人の顔を見るなり毒づく。

「すまなかったな」

頭を下げながらそう言うのがやっとだった。

二人して導き出した答えが正しかったことを確かめられた。ここを訪れた目的はすべて達成することができたというのに、それに対する喜びのようなものはなかった。

「旦那様が、これを……」

見事なロイヤルハynesの花束を抱えた園丁が走って来て、窓越しに渡そうとする。

「ぜひお持ちいただくように、とのことでした」

「では、ありがたく頂戴することにする」

ミッターマイヤーは大輪の花束を受け取った。

「ここでは長く働いているのか？」

「はい、私の曾祖父の代からお世話になっております」

「伯爵はよくしてくれるか？」

「それはもう……どの伯爵様もご立派な方でしたが、今の旦那様は格別で、私共は毎日仕事が楽しくてなりません」

そう答える園丁の顔は生き生きとしており、彼らと汗を流すルードヴィツヒの姿が見えるようだった。

「礼を言っておいてくれ」

走りだした地上車の中は薔薇の香りに満たされ

「きれいなことはきれいだが、薔薇では食うわけにもいかないではないか」

ビットェンフェルトは充満したそれにうんざりとしてつぶやいた。

その五日後、エーベルバッハ伯ルードヴィツヒが急死したとの公式発表がなされた。後継者たる男子がいなかった為に伯爵家は一時的に伯父が継ぐこととなった。

翌年、エーベルバッハ伯爵はリップシュタットの盟約を結び、そ

の数カ月後銀河帝国の歴史からエーベルバッハ伯爵家は永久に消え失せることとなった。

しかし伯爵家が持っていた広大な薔薇園はミッターマイヤーの口添えもあり、そこで働く人々もそのまま国に召し抱えられ、ラインハルトの死後も見事な薔薇を咲かせ続けた。

薔薇の名前(3) (後書き)

タイトルは有名な小説のものをそのまま使いました。映画化もされていて、テレビ放送されたのを見たことがあります。覚えていたのは修道院の中にどうしてあんなに巨大な階段室が?? と思ったことくらいでした。

薔薇についての本を図書館で借りたら、タイトルに「薔薇」の含まれる作品として紹介されており、その時には冒頭シーンと親子というキーワードしか浮かんでいませんでした。それが「薔薇の名前」というタイトルを決めた時に他の部分もパアッと決まりました。

個人的にかなり気に入っている作品で、自分で選んだベスト3に入れています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9914u/>

薔薇の名前

2011年8月11日03時25分発行